

ランチョンセミナー

演題：「フッ化物洗口50年の歩み」

NPO 日本フッ化物むし歯予防協会理事
元日本大学松戸歯学部教授（公衆予防歯科学）
小林 清吾

厚生労働省認可のフッ化物洗口剤（開発：可児瑞夫, 1968.5.）が使えるようになって、50年が経った。1970年、新潟県弥彦小学校で施設単位フッ化物洗口が開始され（境 脩）、本年4月で48年間の継続実施となった。世界で初めてフッ化物洗口による有意なう蝕予防効果を報告した疫学論文（**Torell P. & Ericsson Y., 1965**）（**Horowitz H. S. et al., 1971**）も同時代に遡る遺産である。その後、国内外の先人達による基礎研究と疫学研究が続々と積み重ねられてきた。そして、わが国では「フッ化物洗口ガイドライン」（厚生省医政局長・健康局長通達, 平成15 [2003] 年）、国際的にはWHO「フッ化物と口腔の健康」（高江洲義矩 訳, 1994）、コクランレビュー（2016）、FDIによるフッ化物むし歯予防推奨声明（2017）等に繋がってきている。

洗口プログラムは、フッ化物局所作用に基づくのみで、利用できる対象者が限定される等のことを考慮すると、公衆衛生施策としての最善策とは言えない。しかし、目的意識をもって地域社会での活動に繋がれば、最善の策である水道水フロリデーションの実現につながる貴重な架け橋となる。今日、永久歯萌出前の4歳以上小児から高齢者まで、洗口と吐き出しの動作が可能な個人であれば、手軽に行えてう蝕予防効果の確かなフッ化物局所予防方法として広く活用されている。わが国では、保育園・幼稚園から小中学校の1万2,103施設、約127万人に普及し（2016年現在）、家庭個人単位では73.6万人に利用されていると推定されている（田浦、2016年）。さらに、海外ボランティアとして献身的な活動を続けている日本人歯科医師達が、口腔衛生向上のためフッ化物洗口を活用している事例も少なくない。1) トンガ（河村サユリ：南太平洋医療隊）、2) カンボジア（設楽詠美子）、3) サモア（浦崎裕之）、4) ミヤンマー（角町正勝）等があり、海外学童のう蝕予防に多大な貢献がなされている。

今回のセミナーにおいて、A: フッ化物洗口の基礎科学（予防効果メカニズム、安全性）、B: 有効性疫学データ、C: 普及状況（国内外）、D: 利用反対論誤謬の解説、等を整理し、さらなる活用の伸展を期すうえでの参考情報を提供させていただく。